

# 第33回 消防団員意見発表文集

平成31年3月10日（日）

東京消防庁消防学校

主催 一般社団法人 東京都消防協会

共催 東京消防庁



## 目 次

第一方面支部代表	芝消防団	班長	河野 奈穂美	
お台場の消防団活動			……………	2
第二方面支部代表	蒲田消防団	部長	佐藤 富士子	
東日本大震災被災地での私の決意			……………	4
第三方面支部代表	玉川消防団	団員	山本 亜樹	
女性消防団員としてのこれから			……………	6
第四方面支部代表	野方消防団	班長	秋屋 若菜	
スマホで広げる消防団の輪			……………	8
第五方面支部代表	赤羽消防団	団員	東海林 さくら	
消防少年団との連携による地域防災力の向上			……………	10
第十方面支部代表	練馬消防団	団員	三原 智暢	
小さな積み重ねと信頼関係で笑顔を守る			……………	12
第六方面支部代表	日本堤消防団	分団長	中村 靖弘	
3・11 避難所体験からの教訓			……………	14
第七方面支部代表	金町消防団	団員	中口 ナビン	
皆様ナマステ			……………	16
北多摩支部代表	東村山市消防団	団員	薄 祐輔	
熱い思いを胸に			……………	18
西多摩支部代表	檜原村消防団	班長	吉田 尚樹	
地域に根ざす			……………	20
南多摩支部代表	日野市消防団	副部長	馬場 裕真	
私が消防団員としてできること			……………	22
島しょ支部代表	小笠原村消防団	班長	川本 真裕	
大きな責任と大きな勇気			……………	24

※発表順は当日実施する抽選会で決定します。

# お台場の消防団活動

## 第一方面支部代表

芝消防団 班長 河野 奈穂美

運転手さんのいない乗り物。遊園地のアトラクションのような「ゆりかもめ」に乗って、レインボーブリッジを渡り、タワーマンションの街が近づいてくると、「お台場って、住んでいる人がいるんだー。」と、そんな声がきこえてきたこともある・・・お台場は、できてから二十数年の街です。

私自身がお台場に住み始めたのは、18年前からです。「用意、スタート」で始まったような新しい街は、どことなく生活感の薄い印象がありましたが、住んでいる住宅の自治会の役員になったことで、地域の方々と接する機会が増えてくると、少しずつ住民になった意識が出てきました。「街づくり」について考える場に顔を出すことも多くなり、その中に防災協議会がありました。街の防災のために、消防団への入団を強く進めてくださる方がいらっしやり、「私に何ができるのだろう」という不安しかないまま入団することになりました。入団してからも、消防団活動と「自分にできること」が結びつかず、「一応、消防団員ですが・・・」という状態で月日が過ぎました。

そして、平成23年3月11日東日本大震災が起きました。

学校の避難所に、臨月を迎えている妊婦さんがいらして、万が一の時の搬送のために一晩待機し、翌朝の炊き出しのお手伝いをしました。午前中には、避難された方々が全員帰宅できたため避難所を閉めるということで、私の消防団員としての活動が終わりました。きっと、もっと消防団員としてやるべきことがあったのですが、その時は、それが私にできる精一杯のことでした。

それから、「消防団員として私にできること」を考えてみました。

ホースを担いで走ってみました。筒先を持って放水も体験しました。防災協議会の総会で「おばさんには、ホースを担いで走るのは大変です。」と若い団員の募集もしました。3・11のこともあって関心を持っていただけたようで、その後に、お台場で操法ができるメンバーが入団しました。

今現在、地震や洪水、土砂崩れなど、各地で大きな災害が発生しています。ますます、防災の意識を高め、有事の際は、周りにいる方々と力を合わせて乗り切る必要があります。街の歴史が浅く、居住している人の変化が激しいこれからのお台場には、「お願いができる」関係をつくれる事が大切だと思います。

お台場の消防団のモットーは「挨拶のできる顔馴染みの人を増やす」です。団員同士、声を掛け合い交流を深めながら、操法訓練をはじめ、警戒活動などの消防団活動以外にも、地域の様々な活動にかかわっています。いざという時に、協力し合えるように「知ってる顔」がたくさんある事は「チカラ」だと思

います。地域住民、地域のためにお仕事していただいている方々、企業、お台場に観光にいらしている人。有事の際どれだけの人々がお台場にいるのか想像が付きません。少しでも協力し合って乗り切れるよう、「挨拶のできる顔馴染みの人」を繋いで、「力を合わせるお願い」ができる、そのような消防団活動をしていけたらと思います。

そのためにも、消防署、先輩消防団員の方々の指導を受けながら、技術を学んでいきたいです。

それが私のお台場での消防団活動です。

# 東日本大震災被災地での私の決意

## 第二方面支部代表

蒲田消防団 部長 佐藤 富士子

「みなさん、明日は3月11日」「覚えていますか。」

そうです、8年前の2011年3月11日東日本大震災が発生しました。言葉を失うほどの大惨事。もし、私の地域でこの様な大災害が起きたら消防団員としてどう行動し、どう取り組んだらいいのか考えさせられたのは、私だけではなかったのではないのでしょうか。

私たち、蒲田消防団第三分団では、震災から2年8か月経った2013年11月、分団長の提案で大田区が支援している宮城県東松島市に管外研修として行くことになりました。

大田区被災地ボランティアの同行の下、被災地に入ると雑草が生い茂り、津波で壊されたままの家屋が残る地域やプラットホームだけが残る駅舎など、想像をはるかに超える悲惨な光景に自然と涙がこみあげてきました。

翌日には、停電のため手動でしか閉じられなくなった東名運河の水門を視察し、ここで東松島市消防団の方々の震災当時のお話を聞くことができました。お話は、とても悲惨なもので冷静に聞くことさえできませんでした。

東名運河の水門に避難された人達、その水門まで辿り着けず流され、もがき苦しむ人達。

只、見ているだけで助けられない状況には、もどかしさとやり場のない憤りを持って話しておられました。

そして、亡くなられた方々を軽トラックに乗せ、遺体安置所に運んだこと。身元の分からないご遺体は、地元の長老の協力を得ての確認作業をしたこと。

その後は、避難所の運営、行方不明者の搜索活動、倒壊家屋の撤去作業をしたことなど、2年8か月が経っても昨日のここのように話しておられました。

私は、改めて、消防団の活動は、多岐にわたるものだと痛感させられるとともに、このような悲劇を、私の大切な家族や街に二度と繰り返してはならないと強く決意したのです。

そして、この研修以来、私は消防団員として、今も実践していることがあります。

それは、街の人達に呼び掛け続けることです。

「おじいちゃん、おばあちゃん、地震の備えは大丈夫」、「君たち、明日は町会の避難訓練だね。」、こうして街の人達に寄り添い呼び掛けていくことが、一番身近である消防団員にしかできない活動の一つだと思うからです。

確かに、消防団員一人ひとりの力は微力かも知れませんが、私達、街の

防災リーダーである消防団員が一致団結すれば、より多くの人命を救うことができる大きな力になると私は確信しています。

私達の街「蒲田」は、羽田空港を抱え、東に東京湾、南は多摩川に面しています。

過去に、1703年の元禄大地震では、品川で2mの津波が襲来したと文献に残されております。

「過去は未来の鏡」、震災は必ずやってくると思います。それは、今この瞬間かも知れません。

東日本大震災から8年が経ち、震災の記憶が薄れていく、今こそ、私達の家族、私達の街を守るために一人でも多くの団員を集め、迫りくる震災に立ち向かっていこうではありませんか。

# 女性消防団員としてのこれから

## 第三方面支部代表

玉川消防団 団員 山本 亜樹

私は現在48歳、中学生と小学生の二人の子供を持つ主婦として生活しています。

独身の頃から子供を産むまで、建築関係の仕事を計画から現場管理までを担当していました。その仕事のスキルアップのため「福祉住環境コーディネーター」という資格を習得し、高齢者や体の不自由の方の住宅や施設も手掛けていました。住宅では体の不自由な方が立ち上がる時に必要な高さへの手摺の設置や、福祉施設では車椅子の導線を考えたデザインなどの仕事をしてきました。

ある日、頼りにしていた大工さんの元気がない様子を見て、「何もなければいいな」と考えていました。すると現場で「おい、大丈夫か!」と大きな声が聞こえ、異変を感じ駆け付けると、現場で一人の職人が手を押さえてうずくまっけていて大量の血が流れていました。私は子供の頃から目の前で人が倒れてもケガでの大量出血を目にしてもあまり動じないタイプなのですぐに駆け寄りしました。その人はやはり私が心配をしていた大工さんで、丸鋸で指を切断していました。私はまず、指を押さえ止血を行い「しっかりして!大丈夫!指はちゃんと付くから!」と励まし、現場に落ちていた指を洗ってビニール袋に入れて氷で冷やし、病院へ連れて行きました。

その後、手術により指は元通りになり、本人も安心し喜んでいました。その時私は、消防署で行われる救命講習を定期的に受けていたことが幸いし、その場での対処ができたのだと感じました。

結婚をして、主人の仕事を手伝いながら二人の子育てをする慌ただしい生活が少しだけ落ち着いてきた頃、子供達、学校、地域との繋がりを考えPTAの役員会活動を行い、その活動の一環の救命講習で指導員として活動する女性消防団員の方たちと出会いました。「女性でも消防団員としてこんな活動があるのか」と私は素直に感心していました。

それまでは消防団というのは男性社会で、女性が活躍する場面はないと勝手に思っていました。

私が経験した建築の現場という、やはり男性色の強い社会の中で頑張っていたころを思い出し、家族を守り、地域を守ることに對しての意識が高まり、女性の私でも体力とガッツがあれば、何か役に立つことができるかもしれないと、ステップアップのつもりで消防団への入団を決意しました。

こうして始まった消防団の活動ですが、入団してから今日まで、団の皆さんのご支援、ご協力を受け、消防操法大会では1番員として出場したり、広報委員

会の活動など、色々なことにチャレンジさせていただきました。

さて、去年は今まで経験したことのない自然災害による被害と被災者を目の当たりにし、ありとあらゆる災害への警戒が必要だと痛感しました。

災害はいつ起こるかわかりません。そしてその時、必ず大きな被害と被災された方の不安が生じます。これまでの活動を通して、私に、また女性消防団員としてできることは、女性としての優しさや細やかさを生かした、救護所でのケガを負った人たちの手当や避難所で被災された方へ寄り添い話を聞き励ますなどソフト面の活動が考えられます。

更に私としては、自分が取得した福祉環境コーディネーターのスキルを生かし、被災者の方、特に避難所における高齢者や体の不自由な方の不安を少しでも取り除けるようなサポートや適切な環境の整備作りのサポートを行っていきたいと思っています。

そして、消防団活動を通して築いた団結力と絆を強みに、また、これまで培った知識と経験で、様々な不安に立ち向かう勇気を持ち災害に備える。そういう意識改革を目指しこれからも消防団活動を頑張っていきたいと思います。

# スマホで広げる消防団の輪

## 第四方面支部代表

### 野方消防団 班長 秋屋 若菜

私は小学生の頃、防災訓練に来た消防車と記念撮影をしたり、消防署で訓練する消防士の方の勇姿を見たりしていました。私にとって消防士は、一番身近なヒーローでした。

小学校6年生のある日、インターネットで「消防少年団」の存在を知った私は、憧れの消防士に少しでも近づけると思い、入団しました。

消防少年団に入団してから4年後、高校1年生の2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。地震による津波で多くの人々の命が奪われ、大きな火災も発生するなど、その様子はテレビで連日連夜放映され、心を痛めていました。

しかし、その悲惨な光景の中に、災害に立ち向かう消防士、私がずっと憧れていたヒーローの姿がありました。懸命に活動する、その姿を見ているうちに、「私にも何かできないのだろうか？」という熱い思いが私の心に湧き上がり、インターネットで「消防団」の存在を知りました。

当時16歳だった私は、消防団に入団することは出来ませんでした。小さな頃からの消防士への憧れと、自分の住む街を災害から守りたい、という強い思いは消えることはなく、高校を卒業後、直ぐに、私は消防団に入団しました。

消防団員は、仕事や学業を両立しながら、地域の安全と安心を守るために汗を流しています。しかし、現在、消防団員の人数は伸び悩み、更に、平均年齢も上昇しています。私のような20代の消防団員は少なく、未来を担う人材が確保できない状況となっています。その原因は、10代、20代の若い世代への認知度が低い、ということが考えられます。「消防団って何?」、「どんな活動してるの?」、「女性でも消防団って出来るの?」このような反応が多いのが現状です。

では、未来を担う若い世代の消防団員を増やすためには、どうすれば良いのでしょうか?

現在、野方消防団では、独自に作成した団員募集のポスターやチラシなどに、QRコードを貼り付け、野方消防団のホームページに直接アクセスできるようにしています。そのQRコードを更に発展させ、若い世代が日常的にコミュニケーションツールとして使っている、ソーシャル・ネットワーキング・サービス、通称SNSを活用することを私は提案します!

消防団の日々の訓練、お祭りなどの警戒活動、救命講習指導などの写真や動画をインスタグラムやフェイスブック、ツイッターなどで配信することで、消防

団を知らない若い世代に、消防団の存在や活動実態を知ってもらおうのです。そうすれば、「私にも出来るかもしれない」、「消防団って、カッコいい」など、消防団の存在を知らない若い世代にもアピールすることが出来るのではないのでしょうか？

スマホは若い世代の日常生活の必需品です。そのスマホの機能を使って消防団の存在をアピールすれば、若い世代に消防団の輪が広がり、未来を担う消防団員の確保に繋がるものと確信します！

2020年東京オリンピック・パラリンピックを来年に控え、英会話や手話などの技能も含め、幅広く活躍出来る消防団員が求められています。

若い世代の生活必需品、スマートフォンを活用し、一人でも多くの若い世代に消防団の存在を知ってもらい、街の安全と安心を守るヒーローを増やすこと！それが、私の願いです。

# 消防少年団との連携による地域防災力の向上

## 第五方面支部代表

赤羽消防団 団員 東海林 さくら

私は昨年、大学進学と同時に消防団へ入団しました。私が所属する赤羽消防団第4分団は、女性分団長を筆頭に16名が活動しており、そのうちの半数を女性団員が占めています。入団前は知らない方々と活動することに緊張を感じていましたが、その不安はすぐに払拭されました。アットホームな雰囲気でも居心地の良い活動環境のなか、消防の知識・技術はもちろんのこと、団員として大切にすべきことを日々学ばせていただいています。

ところで、皆さんが消防団に入団した理由は何でしょうか？きっかけは様々あると思いますが、私の場合は、小学生の頃から消防少年団に所属していたことにあります。消防少年団では、防火・防災、応急手当、結索などを学び、規律訓練や火災予防の広報活動などを行います。私は消防少年団の活動を経験するうちに地域防災に対する関心が深まりました。また、高校生の頃に災害時支援ボランティアに登録したことで、地域防災は子どもから高齢者まで全ての住民に大切なことであると実感しました。これがきっかけとなり、地域と住民に貢献できる消防団を知り入団を決めました。

消防団の活動に参加するようになって感じたことがあります。消防団と消防少年団の団員は、それぞれの活動を互いによく知らないのではないかということです。実際、私が消防少年団員として活動していた間は消防団との交流がありませんでした。もし交流があったら、安心して入団することができたと思います。そこで私は、消防少年団と消防団が連携を図ることを提案したいと思います。消防少年団員に消防団を身近な存在であると認識してもらうことで、自然な流れで入団を促進することができます。消防少年団員にとっては、消防団活動がそれまでに学んだ基礎的な知識や技術を実践する場となり、周囲の環境にもすぐに慣れることができると考えます。一方消防団にとっても、若年層の団員を確保することができれば、日々の活動はより活発になり、充足率も上がるでしょう。このようにして、互いにメリットが生まれます。

私にできることで消防少年団員に消防団を知ってほしいと思い、消防団の担当者に相談しました。すると、普段は指導者として参加している消防少年団活動に、消防団の活動服で活動支援をする機会を設けてくださいました。快く受け入れ、対応してくださった職員の皆さんにとっても感謝しています。この活動をしたことで、ただ存在感を示すために支援に加わるだけでは伝わりにくいと気がつくことができました。もっと消防団の活動や魅力を言葉で伝え、日頃の消防団活動に親しみを持ってもらうための工夫が必要であると感じました。

消防少年団を経験したからこそ、消防少年団員に消防団へ入団してほしい、一緒に地域を守る仲間を増やしたい、という思いを一層強く持ちました。消防少年団に消防団をアピールし、入団への自然な流れを浸透させるには、長い時間を要するかと思いますが、いつの日か消防少年団を卒団する後輩たちが消防団への入団を希望してくれることを願っています。

多種多様な災害が発生するいま、消防団の一員として地域の人に貢献する喜びや街への愛着を感じ、「自分たちの街は、自分たちで守る」という思いを持って、地域の防災力がより一層強化できるようになれば良いと考えています。

今後も、消防少年団出身の消防団員として誇りを持って消防団活動に励むとともに、消防団と消防少年団の発展に寄与できるよう努めます。将来は東京消防庁の職員となり、更なる地域防災力の構築に貢献し、「地域の防災リーダー」の育成に携わっていきたいと考えています。

# 小さな積み重ねと信頼関係で笑顔を守る

## 第十方面支部代表

練馬消防団 団員 三原 智暢

「私が選手に？」私は昨年6月の消防団ポンプ操法大会で2番員に選ばれました。大変光栄でしたが、入団して1年半の私が本当にできるのだろうか、という不安が大きかったことを今でも覚えています。

私は練馬区小竹町で生まれ、この町で学童保育指導員として勤務しています。毎日、くったくのない笑顔を見せる子ども達は、たまたま可愛いのです。そんな子ども達の成長していく姿を見る事が私のやりがいです。子ども達を預かる事は、「命」を預かる、という事です。そこで、私が消防団員になれば、より子ども達を安全に預かることができるのではないかと考え、練馬消防団への入団を決意しました。

その時の気持ちを思い出した時、「よし、頑張ろう」「何が何でもポンプ操法大会をやり遂げよう」という気持ちが湧いてきました。

大会に向けてまず初めに取り組んだ事は、昨年までの訓練ビデオを観ながら指一本の動きまで気を配り、2番員としての行動を身につける練習です。1ヶ月間、毎日30分、欠かさず自主練習をしました。

4月に入ってからは選手5人での合同訓練を始めました。訓練は本番まで計18回。私がこの訓練で心がけた事は、とにかく休まず参加する事です。最初は全体の流れをつかむことに注力しましたが、全員の動きを合わせる事が想像以上に大変でした。1人で練習していた時とは勝手が違い、なかなか動きが合いません。しかし、選手以外の団員も毎回、準備や後片付けを手伝ってくれたり、自分では気がつかない客観的なアドバイスをしてくれた事は今でも感謝しています。

訓練中盤では全体の流れをつかんできたので、私の得意分野を活かす事に注力しました。私は小学校から高校までは野球を、大学ではマラソンをしていたので、体力と走力には自信があります。

2番員は走るのがメインでスピードが命です。0.1秒でもタイムを縮められるように、手や足の動かし方を研究しながら訓練を重ねました。

訓練後半は、体力的にも疲れがでてきましたが、苦しい時でも他の選手や団員に悩みを打ち明け、お互いに励まし合いながら乗り越えることができました。そして、いよいよ迎えた6月の大会本番。緊張で体が震えます。とにかく今まで訓練してきた自分と、仲間を信じて頑張ろうと心に決めました。結果は4位入賞。今までの中で一番早いスピードで走る事ができ、仲間とも動きを合わせることもできました。良い結果につながったので、自分も仲間も誇らしく思え

た事が印象に残っています。

私はこれらの経験から、一つ一つの積み重ねが自分を強くしてくれること、お互いの心に思いを寄せる事で信頼関係が生まれ、それがあから人は頑張れることを深く実感しました。これこそが、まさに本物のコミュニケーションなのではないでしょうか。もし仲間との信頼がなかったら、訓練はただの「義務」でしかなかったでしょう。

町を守るのは簡単ではありません。ポンプ操法という一つの活動をするにも多くの知識や技術、仲間とのコミュニケーションが必要でした。今後は子ども達の笑顔が5年後も10年後も続くように、消防団員として自分を磨いていきます。

### 3・11 避難所体験からの教訓

#### 第六方面支部代表

日本堤消防団 分団長 中村 靖弘

私は日本堤消防団の中村と申します、宜しくお願いいたします。

明日は3月11日、東日本大震災から早くも、八年が経過いたします。

2011年3月11日、私は仕事の関係で仙台市に出張に行っておりました。午前中で仕事が終わりを、午後の新幹線に乗車しました。列車が宇都宮駅に到着し乗客が乗り降りをしている時、ユラユラと車体が動き始めました。

やがて、ものすごく大きな揺れが襲ってきました。新幹線の車輪が持ち上がっているのが判るほど、大きな、大きな、長い揺れでした。

やっと揺れが収まり、数百人の乗客は駅員の指示で退避行動に移りました。駅前の空き地に誘導され、駅のシャッターは閉じられてしまいました。

その時、いつもは地元で、消火や救急の災害活動、避難誘導や各種訓練を行っているのに、今の私は（避難する側にいる）（消防団員なのに、何もしてない。）そう思いました。

それからの数時間、携帯も繋がらず、何の情報も無いまま、不安な時を過ごしました。やがて日が暮れ、停電で真っ暗な駅前に、雪がちらつきだした頃、キラキラと赤く光る誘導灯（ニンジン）を持った、市役所の方の「避難所を設置しました、付いて来てください！」との声が聞こえてきました。

いつの間にか、列車から退避した人の何倍にも増えた避難者の方々と共に、私も真っ暗な道を歩き始めました。

誘導する方が少なく、一人の方が前後を動き回っていたので「私は消防団員です、お手伝いします」と申し出ました。いつも持ち歩いている懐中電灯を取り出し、後方の方々に「こちらです」とくるくる回しながら、大声で誘導を行いました。これからどこに行くのか、行く先は判らないけれど、誘導灯が曲がった方向に「こっちです」と合図し、橋を渡った先の中学校にやっと、到着しました。

校舎に入ると明かりがついている教室に入るよう案内され、到着した順に手前の教室から中に入って行きました。室内で一息ついてから、案内をされていた市役所の方に、消防団員である事を告げ「お手伝いします」と申し出ました。その方に「こちらも人数が少ないので助かります。宜しくお願いします」と、言われました。

そして、後から到着された方々を、空いている教室にご案内しました。

赤ちゃんを連れのお母さんがおられ「大丈夫ですか」と、声を掛けました。

その時、フッと気づいたのが、各教室には男性も女性も、到着順に入ってもら

っているだけだ、と言う事でした。

少し落ち着いてきた時に、先程の担当の方に「各部屋に男女がゴチャゴチャに入っています。お子さんや赤ちゃんを連れていらっしゃる方が居られるので、部屋を分けた方が良いのではないのでしょうか？」と進言し、カーテンのついている教室があった事を、報告しました。

しばらくして各室に「女性専用の部屋を作りました」との連絡があり、移動される方々の、お手伝いをしました。

その後救援物資が到着し、防寒用の毛布を箱から取り出す作業を行いました。室内にいた若い方数名が「僕も手伝います」と言って来てくれました。

その方達と作業を手分けして、数百枚の毛布を配布しました。

その後もランダムに到着する、食料品や飲み物等の仕分け、配布を、明け方近くまで行いました。

避難所の中では、特に何もすることがないので、お手伝いをしてくれる方を募るのも、有効な手段ではないのでしょうか。

的確なお願いと、的確な指示があれば、協力をしてくれ方は、居られるのではないかと思います。

いつもは地元の浅草で、消防団の仲間達と色々な活動を行っていますが、（いざ！）と言う時、自分が何処にいるのか？地元ではない場所で、自分一人だけだったら？なんて、考えたこともありませんでした。

でも、もしかしたらそんな場面に、皆さんも遭遇するかもしれません。

その時は、消防団員である事を申し出て、少しでも何かのお手伝いをすることが重要だと、この体験を通して感じました。

そして、この体験が、自分自身への大切な教訓になった、と思っています。

「どんな時でも、消防団員である！」「備えよ・常に！」の心構えを持って、今後も消防団活動を続けて行きたいと思います。

本日はありがとうございました。

# 皆様ナマステ

## 第七方面支部代表

### 金町消防団 団員 中口 ナビン

皆様、ナマステ（こんにちは） 私の出身国はネパールです。

ネパールは、南はインドで、北は中国に接する細長い国です。エベレスト登山の玄関口として皆様ご存知の方も多いかと思えます。

私は、高校までネパールで過ごし、中国の大学を卒業後、日本の企業への就職を機に、平成11年に来日し、まもなく20年になります。5年前に帰化しました。

私は、もともとボランティア活動に興味を強く持っていましたが、ネパールでは、ボランティア活動の人口は少なく、国民の消防事情に対する知識も低いと感じていました。

以前からあった「人の役に立ちたい！」そんな強い気持ちが今、住んでいる葛飾柴又の地で消防団というものに出会うきっかけを作ってくれたのです。

入団して間もないころ、分団長から「操法大会に出てみないか」と誘いがあり、2番員として参加しました。はじめは、何をしてもよいのかまったく分からず、チームとしての活動である操法はうまくいかず、毎日が不安との戦いでした。そんな時に、先輩からの熱血指導と温かい支援、家族の協力のもと操法大会を迎えることができました。

ふりかえると、訓練する先輩方の懸命な姿が大変印象的であり、操法だけではなく、規律・礼儀・チームワークの重要性を学ぶことができ、特に日本人が大切にしている「人情」に触れることができました。

現在、日本に住む外国人の数は、約240万人いるといわれ、年々増加しています。そのうち、東京に住む数が最も多く、首都圏の人口の4%弱を占めています。また、東京では様々な国際イベントが開催されていますが、その中で最も世界から注目されているのは、2020年の東京オリンピック・パラリンピックです。2千万人の来日が見込まれています。

さて、葛飾区には、外国人観光客が注目する観光資源がたくさんあります。様々な国から様々な文化・思想を持った外国人が柴又などにも訪れます。

日本語が話せない外国人は、地震や台風などの災害に遭遇したときにどうすれば良いかわからないはずです。来日される外国人に安心して滞在していただくために、消防団の役割も非常に重要だと考えています。

消防団の使命は、地域の方々や友人、知人そして家族を守ることです。

何かあったときは、周りの協力を得ながら大切なものを守っていく、こんなにも素晴らしい活動はないと思います。私自身も、入団したことでたくさんのこ

とを学び、優しさに触れることができ、また地域の方々との多くの出会いに、心から感謝しております。本当に消防団に入ってよかったと思っております。私は、海外で様々な外国人と接してきた経験があり、ネパール語、英語、日本語、中国語、ヒンズー語の5か国語ができますので、言葉のコミュニケーションというツールを持っています。

オリンピックイヤーでは消防団の正服に身を包み、消防団から得られた人情や地域とのつながり、感謝の思いなどの大切な経験を言葉のツールを使い、困っている外国人に手を差し延べたいと思っています。

さらに将来は、消防団で学んだ規律！礼儀！チームワーク！そして人情！をネパールのために役立てればと考えています。

ダンニャバード ご清聴ありがとうございました。

## 熱い思いを胸に

北多摩支部代表

東村山市消防団 団員 薄 祐輔

今となっては恥ずかしい話ですが、私は30年間消防団の存在を全く知りませんでした。地元東村山市に生まれ、ずっと東村山市に住んでいますが、残念ながら消防団の活動を目にすることはなかったのだと思います。入団して2年、私は消防団員として色々な経験をさせていただきました。その経験や感じたことや思いを意見として発表したいと思います。

まず、消防団活動の経験の中で感じたことは、分団長はじめ先輩消防団員のみなさんの真剣な思いです。もちろん、活動の経験といえば、規律や放水訓練などは当然ですが、一つ一つの活動を本当に真剣に取り組んでいる先輩消防団員のみなさんに圧倒されました。入団当初、私は規律はもちろん、防火衣の着方、用具の名前、使い方、何もわかりませんでした。そんな時先輩団員のみなさんは丁寧に何度も教えてくれました。同時に、放水訓練の時に筒先の持ち方が違っていたときには真剣に怒られました。私は一度聞いたことがあります。「どうしてそんなに真剣に教えてくれるんですか？」正直私は消防団はボランティアだからまじめに活動してないんだろうなあ、とっていました。その質問に対し、「早く消防団のことを覚えて、地元のために活躍してもらいたいからさ」と言われました。私は自分の思っていたことを心から恥ずかしく思いました。その言葉をかけて頂いた私は、先輩たちの「自分たちの街は自分たちで守る」その思いが、建前ではなく熱意として伝わってきました。私も早く戦力になり地元のために活躍したいと本気で思い、今も活動に真剣に取り組んでおります。次に、活動の中で感じたことをお話しします。それは地域のみなさんのとても暖かい励ましです。ポンプ車で巡回しているときや火災時など、私たちを見ると家の窓を開けて手を振ってくれたり、ときには「寒いけど頑張ってるね、いつもありがとう」という優しいお声をかけてくださったりします。私たち消防団員は自分の意思で自分の街を守りたいから活動しているのに、地域のみなさんがこんなにも応援してくださることは本当に励みになりますし、活動を通して恩返しをしたいと常に思っております。

最後に、私の思いをお話しします。最初にお話ししたとおり、30年間自分の知らないところで、先輩消防団員の方々に街を守って頂いておりました。これからは、その恩返しをしていきたいと思っております。消防団としての誇りをもって、素晴らしい先輩と素晴らしい地域のみなさんと私たちの街を守っていき、そして消防団の伝統を次の世代に繋いでいき、これからもみんなが安心して暮らせる東村山を作っていく、私はその思いを持ってこれからの活動に励

みたいと思います。

# 地域に根ざす

**西多摩支部代表**

**檜原村消防団 班長 吉田 尚樹**

私の住む檜原村は急峻な山々に囲まれた山村地域です。人口約2200人の村は26の山村集落から構成される陸続きでは都内で唯一の「村」であり、多摩川の支流である秋川が北と南から流れ、丁度村の中心部で秋川本流となりお隣のあきる野市へ流れていきます。水の綺麗な秋川にはヤマメが泳ぎ、夏にはカジカガエルの合唱が聞こえる自然豊かな山村地域です。

今年40歳になった私は31歳まで23区内で育ちました。都心での仕事を辞め、林業を生業としようと考え転職したのがこの縁もゆかりも無い土地へ越してくるきっかけでした。引っ越して間もなく、自治会長と集落の方々に、「吉田さん、お祭り出られる？」と聞かれ、よく事情もわからず二つ返事で参加し始めた秋の獅子舞奉納が私と檜原村地域社会との最初の接点となります。祭りに関わるようになり、若い人が少ないこの村では自治会、お祭り、消防団という地域活動を集落の20代から40代の働き盛り世代が掛け持ちして活動しているということを初めて知りました。

お祭りに参加し始めて3年目、当時の部長から消防団へ誘われ、今まで接点のなかった消防団という世界になんの予備知識も無いまま入団することになりました。入団2年目、初めての操法大会の年、右も左もわからない私は大会前数ヶ月と続く操法訓練の中、ホース巻きと交通整理しかできない自分を不甲斐なく感じました。しかし、訓練を共にする仲間の悔し涙、先輩方の真剣な眼差し、気持ちの熱さを肌で感じることができ、大会直後、次の大会に選手として出場させて欲しいと直談判している自分に自分自身驚いた記憶があります。

2年後の初めての大会では5月から9月末までの約5ヶ月間の訓練期間を経て檜原村消防団消防操法大会、西多摩地区消防大会と出場しましたが、残念ながら悔しい結果で終わりました。期間中は仕事と操法訓練、夏は祭りの練習も重なり、想像以上に厳しいなと感じたこと、またそういった状況で結果を出すことの大変さを改めて痛感しました。

消防団に入団し、一生懸命活動することによって「村外から来た吉田君」が、少しずつですが、周りのみんなから仲間として認めてもらえるということがわ

かりました。とある飲みの席で、団員の一人が、

「吉田君の家が万が一火事になったら仕事中でも俺は消しに行くよ。」

と、言ってくれたことがありました。もちろん誰の家であろうと火事になれば消防団として消火に行くのですが、その言葉の裏にある気持ちがとても嬉しかったことを覚えています。私個人としては入団して活動することによってかけがえのない横のつながりができたこと、努力すれば自分も地域の一員になれるのだということを日々実感しています。

詰所に掛けられた歴代部長の名前、歴代ポンプ車の写真や数々の表彰を見てみると、代々この土地に根ざし、暮らしてきた方々の想いをひしひしと感じます。楽ではない消防団活動続ける意義、消防団活動の目的は、第一には村民の生命と財産を守ること、そしてその目的の後ろには地域の文化や生活を次の世代に繋げていく、そんな共通の想いがあるのではと思います。

私は、幸いまだ大きな火事場に遭遇したことはありません。しかし、万が一の有事に備え、日々の操法訓練、山林火災訓練などを積み重ねることの大切さを痛感しています。地域に根ざした暮らしを営み続け、継承していく為にも消防団活動は存在している、そのように考えています。

# 私が消防団員としてできること

**南多摩支部代表**

**日野市消防団 副部長 馬場 裕真**

私は日野市に生まれ育ち大学卒業後農業という地域に根ざした職業に就きました。

もの心ついた頃から父親も同じ職業、同じ消防団員として地域活動に励む父親の背中を見て育ってきました。

本日は消防団活動の火災出場、操法大会、広報警戒活動、防災訓練など、この数あるキーワードの中で本日は活動服を脱いだ時の私の取り組みを発表します。私の管轄地区は浅川という河川、多摩丘陵の山林を抱えております。台風などが到来した時には夜通し警戒活動にあたったこともありました。

東京であっても少子高齢化社会が到来するといわれておりますが、私の地区も消防署員の方と防火診断に伺ったときに高齢者のみの世帯、空き家がかなりあるという印象を受けました。

そんな中消防団員として地域懇談会という地域住民と行政の方と一緒に地域課題を解決する懇談会に参加しました。

そこでは、最近、地域とのつながりがなくなり自然災害が多発する昨今いざ災害が起こった時にどうしてよいかわからない、高齢者夫婦だけで非常に不安だ、などの声が多数ありました。

行政が行っている防災訓練もありますが、もっと小さいコミュニティの中で行う必要があると考え、そこで私は同じ農家の先輩で消防団のOBの方と毎年行っている、畑での収穫祭を昨年から防災の観点から行ってみることにしました。元々東京にある農地、都市農地は年々減少の一途をたどっておりますが、まちなかに畑があることにより火災の延焼防止、災害時の一時避難場所、資材置き場、アスファルト舗装の多い都市部においては豪雨災害時の洪水の緩和、農業用井戸の飲み水としての使用、など多面的、災害時の公共的な価値が最近見直されてきています。しかしながらそのことを知っている都市住民の方はそんなに多くありません。

当日は畑がある周りの自治会の方がたくさん集まってくださり、老若男女問わず全員で災害時を想定しての炭、薪を実際に使って炊き出しの野菜汁や災害時に使うアルファ米の炊き込みご飯も調理しました。

農業用ビニールハウスの中に入ってもらい冬場でも被災時には暖かく過ごせる事、雨、風をしのげる事を実感してもらいました。参加者全員で協力し合い、真剣な中にも和気あいあいとした雰囲気でした。

そしてハウスの中では、私の消防団としての日々の活動や取り組みを紹介させ

ていただきました。

参加された方からの中には「畑に行けば野菜と水があるから安心ですね」とか、「東日本大震災の時は今までに体験したことのない地震の中、当時どうすればわからないまま身の危険を感じ畑にすぐ避難した」などの声を聞きました。

自助・共助・公助の中で行政の支援もままならない中での災害時に、さらなる市民の方の防災意識を高め、そしてこの自助・共助の取り組みを市内全体でできることはないかと考え私は昨年度から日野市まちづくりマスタープランの委員に就任いたしました。

この委員会会議を通じて一人でも多くの市民の方に防災、減災の意識をもってもらい自助・共助の大切さを実感してもらいたいと強く感じました。

今後の私の取り組みとしては、この農地を活用したコミュニティ防災訓練を更に多くの方に参加してもらえるよう SNS 等を活用した周知をしより多くの方に参加していただき、市役所、消防署と連携し市民の方に防災力の向上してもらえようような取り組みをしていきたいと考えています。

また最近は大学生や NPO 法人が空き家を活用した地域コミュニティが市内各地で立ち上がっており、その方々とコラボレーションをしていきたいと考えております。私の職業を生かしてアプローチをし、親子連れや普段防災訓練等に参加したことがないような方にも実際に見て、体験して、楽しく、学んでおいしく交流できる企画を考えております。

災害が起こったときは老若男女誰もが自分の身は自分で守らなければなりません。

最近の自然災害の多発、そして首都直下型地震は必ず起こるといわれており、市民の方の危機意識が高まってきている反面、一昔前と違い地域のつながりがなくなってきております。

消防団員として普段からの訓練、活動はもちろんのこと、これからは時代に合わせた形での消防団の取り組み、様々な職業の方がいるこの消防団で本業を活かした地域防災の要として使命感を持って消防団員活動していきたいと考えております。

# 大きな責任と大きな勇気

**島しょ支部代表**

**小笠原村消防団 班長 川本 真裕**

東京から南に1000km離れた小笠原村は、父島・母島を始めアホウドリの帰巢が近年確認された聳島列島・硫黄島を含む火山列島・日本の最南端である沖ノ鳥島・最東端の南鳥島を含む大海原に囲まれ自然あふれる世界自然遺産に認定された村です。そのうち小笠原村消防団は父島と母島の2島に配置され、父島約2,100名、母島約500名の他、年間を通して来島される観光客の皆様他、多くの方々の生命財産を守るため、日々の資機材の点検・定期訓練を東京消防訓練所の皆様の協力を仰ぎながら励んでおります。

私が小笠原村消防団に入団してから早いもので13年たちました。この13年を振り返ってみると、火災現場への出動、観光客や島民の方の行方不明者の捜査、津波警戒等、出動した現場を鮮明に思い出すことができます。なかでも先輩団員から現場で教えられた事や行動で示していただいたことは強く心に残っており、現在消防団活動を行うに当たっての大きな糧となっております。

近年、日本では全国各所で大規模な自然災害が多発し、ますます地域に根ざし地域住民の方々を良く知る消防団の必要性が増しております。常備消防の無い小笠原村では、消防団が地域で起こる火災や津波等の災害に対し、最前線で関係機関と連携し対応しなければなりません。そこには地域を担うという大きな責任と、地域を守るという大きな勇気が団員に求められます。

東京都などの大都市では、核家族化し地域との繋がりが薄れ、隣同士でも話したことも無く、顔も知らないということが常態化している地域もあります。そこでは地域を守る消防団の益々の充実を図り、近隣同士のコミュニティーを把握し繋げていくことも消防団員の大切な役割ではないでしょうか。しかし小笠原村消防団におきましても消防団員の定数が必要とされている人数に満たないという現状に直面しております。班長を拝命し運営に係る立場となり、消防団員の充実を呼びかける団長を初めとする幹部の方々と行政担当者の苦勞がやっとなわかってまいりました。

災害は起こらないことが一番ですが、災害が発生したときに備えなくてはなりません。日々の地道な訓練や点検作業を、仕事をやりくりし、家族や友人と過ごす休日をつぶして行っていくことは、家族の理解や職場の理解はもとより地域住民から必要とされ頼りにされているということが必要だと考えます。

そのためには、消防団がどんな組織であるのか、どのようなことができる組織であるのかを住民の皆様にご存知いただき、実際の活動をアピールしていくなどの広報活動が重要であると考えます。地域住民の頼りになる存在、高齢者・子どもたちの憧れの存在となることはできると思います。このことがやりがいにつながり、消防団員の増加につながるのではないのでしょうか。

小笠原村消防団に先日ドローンが配備され早速ドローン操作の訓練を実施してきたところです。海に囲まれ希少な植生を持つ世界自然遺産である小笠原では、調査や植生回復作業のために多くの方々が海や山にはいります、急な断崖を通らなければたどり着けない所などの普段は人が立ち入らない場所もあり、万一事故が発生したときの捜査は困難を極めることが予想されます。そのような場所での活躍が期待されます。ドローンのコントロールは市販のゲーム機に近いものでした。こういった最新機種を積極的に活用しアピールすることは、新規の団員を獲得するための一助となるのではないのでしょうか。

私は地域の方々から多くの恩を受け日々くらししております。その恩をすこしでも地域の方々にお返しできるよう今後も消防団活動を行っていこうと思います。